

---

# 筆持つ阿呆に、読む阿呆。

きゅうり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

筆持つ阿呆に、読む阿呆。

### 【Nコード】

N5025Y

### 【作者名】

きゅうり

### 【あらすじ】

『小説家になろう』の作品は、私の作品以外クソである。

私の小説は必要だが、他は必要ではない。

他の小説を読むより、私の小説を読む方がよっぽど有意義である。

つまり私が言いたいことは。

頼むから黙って、私の小説だけを見てくれ。



## 001 読者など要らぬ。ただちに去れ。

「この、愚か者！ くたばれ、おたんこナス！」

遺憾ながら上記の一句は、小説の物語の内に住む誰かに向けられた言葉ではなく、この文章を目に通すあなたに向けた一言である。驚かせたなら失礼千万、しかしながら前言を撤回する気は毛頭ないとも言っておこう。

読者各位様、恐らくあなたたちは相当の読書好きであつたり、本の虫であつたり、はたまたビブロマニアックであつたりしてきつと数多くの書物に目を通しておられると推察致すが、恐らく一行目の第一句から罵られた経験は無いとおもふ。

けれども、この導入部分は決して斬新な手法で読者の興味を惹こうだとかそんな考えのもとに出た発言ではなく、私、筆者が、あなたたち、読者を、心の底より愚かだと思ったから侮蔑申し上げたわけである。

では、何故私がこのような発言をするに至つたのか。

理由は単純で明快である。

この「小説家になろう」のサイトの中には、それこそ面白い作品が星の数ほど存在している。例えば、設定が破綻している魔法モノであるとか、散々使い古された設定をドヤ顔で書き連ねたドラゴンモノだとか、陳腐極まりない恋愛モノだとか、エトセトラ。

そんな中で、わざわざこんなどうしようもない、畑の肥やしにもならない作品を開いて目を通して、挙句ここまで読み進めて貴重な時間をドブに捨てたあなたには、そりゃあもう「愚か者！」と言わざるを得ないわけである。「くたばれ」と言われても仕方ないのである。「おたんこナス」だといわれるのは自業自得なのである。

何を期待してこの作品を開いたのかは知らないが、この作品に何かを望むのは間違っていると断言しておこう。何一つとして期待さ

れざる作品である。重ねて断言申し上げる。  
以上である。

なんだ、まだ読んでいるのか。

君は莫迦なのか、それとも阿呆なのか。

バカは、バカであるゆえに自分がバカだと気付かない、とはよく言ったものだが、しかしそれはバカを肯定しているということにはなりえない。自分がバカだと気が付いていない者ほど醜いものがこの世にあるだろうか。

まだこんな悪文に目を走らせる末期バカ患者の君にもわかりやすく例えてやろう。

いわば、この小説は道端に落ちている冷え固まった犬のクソである。

そしてあなたは、その傍でしゃがみこんでジッとクソを眺めているようなものだ。

どうだろうか。バカなあなたにも、あなたのバカさ加減が理解して頂けただろうか。

そういうわけで、サヨナラだ。

どうにも、まだこの小説の片隅でゴソゴソと何かが蠢いている気配がする。やれやれ、馬鹿に付ける薬は無いというけれど、どうにも特效薬のない悪患者がまだ居残っている様子だ。

まっとうな感覚の人間ならば、開口一番罵られたことに憤懣するか、はたまた呆れるかして何処かへ去るはずである。

まだ残っている諸君は、異常であると言わざるを得ない  
むしろ猛者だと褒めてつかわしたい心境ですらある。

罵詈雑言のために開いた口も、閉口である。

よろしい、筆者も根負けした。

ならば勝手にするが良い。もはや、このクソを眺めるあなたたちに干渉することはしない。読みたければ勝手に読むが良い。但しそれによって、どういう悪情、劣情を抱いたとしても、それは筆者のあずかり知らぬところである、ということだけは承知していただく。

この小説は、筆者の日常を、ときには大胆に、ときには繊細に綴った私小説である。

平たく言えば、日記帳だ。

さらに言えば、自己満足の自慰ですらある。自慰でしかない。

文章を書く練習のために、何気ない平々凡々日々常々を記しただけの、それこそチラシの裏にでも書いておればよろしいという程度のものだ。

内容は悪逆、悪相で、それを語るは悪声、書き方は悪辣で悪罵、総合的に見て悪魔的で、なおかつ筆者はただの芥である。筆者はコンプレックスの塊であり、見せたいところなど一つも無く、魅せるべきなど一つも無い。

それでも良い、むしろそれが良いと言う、そんな悪たれどもは、勝手に筆者の通った轍を眺めるなどすればよろし。

それでは今を持って、冷笑的で毒舌的なダイアリイの開帳を宣言す。

## 002 嘘です、読者様は唯一無二の神様です。

初回の冒頭で述べたとおり、当紙は何の面白味も有り難味もない筆者の日常を、嘘と脚色で飾り立ててなるべく面白く書きつづつてやろうというものである。

無意義な日常をなんとかかんとかして、文章をこねくり回して有意なものに変えてやろうといった魂胆である。

しかしながら、例えばそこに素晴らしい脚本があったとしても、何処の馬の骨とも知らない人間の演じるドラマが売れるだろうか。答えは推して知るべしである。超一流の脚本と演出で織り成されるドラマよりも、キムタクあたりを主演にあてたB級ドラマの方が売れる時代である。

ゆえに、何だかんだとりあえずである、筆者の人となりを知ってもらいたいのである。

知った方が良いのである。

知るべきである。

今後作品を楽しむために、知れ。

私は男である。

生まれたときは裸であつたし、今も時として裸である。

趣味は部屋に引き籠もって出来ることであり、酒と煙草を嗜好する。言うまでもなく裸で、である。

両親ともに健在で、七つ上の兄がいるが、私は丸々太った彼の連絡先を、豚とアドレス帳に記している。

日中はラーメン屋、夜はコンビニで働いており、何の変哲もない両アルバイトが、意外とアイデアの源泉だったりする。

嫌いな人間は常識の無い人間で、好きな人間は常識を知りつつ破

る痴れ者である。

そして、私は大学生であった。

小説家を目指すと言ったきり学校に行かず数ヶ月引き籠もった後、両親と三日三晩の死闘を演じた末に、退学する権利を勝ち取った。心身ともに満身創痍であったが、銃創にまみれたその足はとても軽やかなものであった。

その足で意気揚々と大学へ闊歩し、威風堂々と校門をくぐったのち事務室のドアを勢いよく開け放って、凜として事務員に退学書類を突きつけた。

その光景はまさに、私の覇道の第一歩であった。

「記入漏れがありますので、再度提出をお願いします」

覇道の一步目は、奈落の底に通じる落とし穴であった、無念。

片道二時間半の通学に心身ともに疲弊しきつた私は、今となっては一月末を持って、学費未納者として向こうから放校してくれるのを待つ身なのである。

ところで、一度目の学費未納時に大学側から届いた書類の文面は恐ろしいものであった。

大学側曰く「期限までに学費を納付できない方は、しかるべき処分をご容赦下さい」ということであった。

「ご容赦下さい、などと聞けばこちらが嘆願されているかのようにもおもえるが、その言葉の実のところは「銭、払えないなら、君、終わりね」ということだ。まるでオブラートに包んだ死神の鎌である。その切っ先の鋭さたるや、オブラートを突き破っており凶々しい本質の部分が隠しきれいていないではないか。

私は元々辞めるつもりの人間だったからいいものの、だ。

もしも仮に私が、勤勉であるが家庭の貧窮により学費を払うことが出来ない苦学生のような立場だったならばどうだっただろう。

あの冷酷無比な文面を見ただけで錯乱の極致に達して、タコによ

うにぐにやぐにや、イカのようにぐにやぐにやと、二泊三日ほど全裸で踊り狂う羽目になっただろう。公衆の面前、それも人通りの多い阪急梅田駅辺りで、である。そして然るべき後に、貧しさと社会的恥辱により死んだに違いない。

私立大学というのはどうやら、金の無い人間は死んでもよいとさえ思っているのではないかと、私は疑っている。

けれど私は精神的に鍛錬された芯の強い人間であるゆえに、そんな苦境もものともせず、ただただ放校を待っているのである。

そんなこんなで、私は退学生である。

大学生と退学生、響きが似ているこの言葉を見比べて、押韻愛好家の私は至るところで活用することになっている。

どこその店に、例えばカラオケ屋に行ったときに、「退学生です」というと、十中八九店員は「大学生の方は、学生証の提示をお願いします」と言う。そこで、「いいえ、退学した生徒なので、退学生です」と言っただけなのだ、ふふん。

そうすると店員は、白けた様子で表情を引きつらせて、私に対して無慈悲に一般料金の支払いを強要するのだった。

この世には神も仏もない。そこにあるのは、悔しさに唇を「？み」、世間に対してもう「放つとけい」と拗ねてみせることしか出来ない自分だけだった。

とは言いつつも、自分で選んだ道なので一片たりとて後悔など無い。

私は基本的に厭世的な人間であり、いつどこでどのように死んでも、まあいいか、と考えているような人間である。ゆえに、つがいを見つけない種の存続を守るといふ本能的な欲求に従うよりも自分の好きなことをやりたいな、と思うような人間なのだ。

なのでいまここでこうしてこんなことをしており、ありがたくも

落伍者の刻印を押される羽目になったわけである。

以上が、自分の現状を簡潔にまとめたものである。

私に関しては、これからお話を読み進める上で最低限知っておいてもらわねば困るが、あまり長々と書き連ねるのも退屈であるので、自己紹介はこれでよしとしよう。

私がどのような人間であるか、ということとは、これから綴る日記に沿って掘り下げて知ってもらうことにしようと思う。

### 003 意中のコンビニ店員を、落とす方法

筆者が大学を辞めて小説家を目指しているのは今更言うまでもないが、もちろん夢だけでは日々の糧もろくに贖うことはできない。

そういえば昔誰かが、「飯のために夢を叶えるんやない。夢叶えるために飯を食うんや」と言っていたのを今ふと思い出したが、よく考えてみればずいぶん不可解な言葉であると思う。

「夢を叶えるために飯を食う」というのはつまり、今の時点では夢は叶ってないわけである。いわば夢を語っているだけの状態である。夢を語るだけの立場でありながら飯を食うというのは、それはもはやタダ飯喰らい以外のなにものでもないのではないだろうか。夢を語ることで具体的な収入を得ることが出来るのならまだしも、そうでない場合はタダ飯喰らいが開き直っているだけのようで、いささか私としては嫌悪感を顕わにせずにはいられない。

夢を切り売りしてもお金を稼いでいる方が、断然カツコイと私は思う。

話が逸れたが、つまり私は夢を語っては働きもせずに飯を食う類の人間ではなく、いちおうフリーターとして少ないながらに賃金を稼いでいる人間である。高価な何かは望むべくもない額の収入であるが、恬淡とした人間であると自負しているぐらいなので、高望みをすることもなければ、何とか生きていけている。

陽光照りつける明るい時間帯は、平、休日問わずラーメン屋でバイトをしている。

そして週に二度、週末の深夜から朝にかけてはコンビニでバイトをしている。

ラーメン屋の方はまだ入ったばかりで駆け出しのペーパーであるが、コンビニの方は働き出して一年と半年ぐらい経とうとしており、それなりのプロフェッショナルである、とわれながらに思っている。

コンビニ業界の酸い甘いを知り尽くし、果てはその片隅の方に小さく見える深淵の如き業界の闇の深さも、知っていたり知っていなかったりする身である。

コンビニ店員を落とす方法、というのはつまるところ、コンビニ店員を自分に惚れされる方法のことである。一見すると難しそうにも思えるが、セブ ア ドアイホールディ グスにこの私-in、業界きつてのの雄であるとされている私だ。赤子の頬をつねるより容易い

さて、前置きはこれぐらいにして、コンビニ店員を落とす方法の具体的な指南に入っていきたいと思う。

が、まずは問いたい。

「あなたは、自分の容姿に関して、自信がありますか」

もしこの質問に、何の迷いも躊躇いも無く、力強く頷けるあなたに言うことは何も無い。

連絡先を紙などに書いて渡せば、万事解決である。

私が指南するのは、地道に好感度を上げていき、外堀を埋めて落とすタイプの戦略である。そもそも始めから、好感度というバロメーターなど論外とするかのようにコロコロと異性を落とす諸君には、私からもたらすことの出来る恩恵など存在するはずがないのである。それどころか、妬み嫉み僻みの言葉しか出てこない。

「イケメンなら死ぬ」「美人なら抱かせる」「それが出来ないなら即刻去れ」

そんな具合である。

……こんな暴言を羅列すると、気を悪くされたかもしれない。けれど安心して欲しい。

あなたが私に気を悪くする以上に、私はあなたに気を悪くしているのだから。

そんな私をあなたは、醜い嫉妬だと笑うかもしれないが、それは仕方の無いことである。顔が醜い以上は、嫉妬する姿も醜くなるものである。それどころか、私が何をしたところで醜いのである。

読書感想文で市から表彰されたあの日も、運動会の駆けっこで一等賞を取ったあの日も、私は例外なく醜かったに違いない。

はっきりと言うが、私は、自身が醜いゆえに、見た目の美しいものが嫌いである。

というわけでだ、容姿端麗の諸君、帰れ。

但し、「どうしても容姿だけでは、気になるコンビニのあの子を落とせないのです、助けてください」と言うのであれば、器の大きい私であるから情状酌量の余地を与えないでもない。

そこに直つて平伏すが良い。そして私のために神殿を立てて、一日に三回私の居る方角に向けて礼拝すると誓え。

そうすれば、私が心根より憎む白皙の諸君にも、私の恩恵の一抹を与えてやらんでもない。

なんたって私は、優しい人間なのだから。

さて、冒頭の質問に対して、伏し目がちに首を横に振つたあなた。つまるところ、外見が醜いという何のありがたみもない、ドス黒い糸で私と繋がれた同志のあなた。

まずは、安堵してほしい。

私の教授する手法をもつてすれば、どんなに顔が醜くともコンビニ店員を落とすことが出来る、と約束する。それどころか、大した努力もせずに次々と異性を己が手中に陥れる、癪に障るあの勘違いどもを出し抜くことすら可能である。

彼らは、いわばたまたま遺伝子配列がちょっと良かっただけの、

ラッキーマンでしかない。

これまでに何の苦しみもなく、日々の研鑽を怠り、歓楽を享受するだけの、息をする阿呆である。

そんな彼らが、ちゃんとした過程を経て、努力してきた人間に太刀打ちできるはずがないのだ。

立てよ、顔の醜き諸君。

いまがまさに、捲土重来のときであるぞ！

しかしながら、少しばかりの問題がある。

私は、容姿の優れた人間が嫌いなのと同じくらい、同族嫌悪によって容姿の劣る人間も嫌いなのだ。

私自身が醜いことを否定する気はさらさらないが、かといってそれは、私が醜い人間を好きだということにはならない。

そもそもの話だ。

われら醜い人間は、孤高の士であるはずではないか。

種の存続を諦め、人間が普遍的に享受できるはずの恩恵を諦め、拳句には全うな社会的評価を得ることすら諦め……。そうやって全てを諦めた先に、我らの醜いながらも鋭く尖って芯の強い誇りがあつたはずなのである。

それを、「安堵してほしい」と言われればすんなりと安堵し、「容易く異性を落とす方法があるよ」と言われれば春うららかな露出狂も真つ青な破廉恥ぶりで乗っかるうとする。

私は、誇りを失ったそんなあなたがたが姿が気に喰わない。

醜い人間は何をしても醜い、と書いたけれども、誇りを捨てて易き道を選び大衆に迎合しようとするあなたたちは、いつにもまして直視しがたい醜さである。

気付いてないのなら、鏡を貸して差し上げようか。

重ね重ねはつきりと言わせてもらうが、私は見た目が醜いものが

嫌いである。

というわけで、容姿が暗澹たる諸君、帰れ。

但し、「何と罵られようとどれだけ醜くなるうと、私はあのコンビニの子だけは落としたいのだ、助けてくれ」というのであれば、また別の誇りを見つけた諸君を私は穏やかな目で見てやらんこともない。

そこに直って平伏すが良い。そして私のために神殿を立てて、一日に三回私の居る方角に向けて礼拝すると誓え。

そうすれば、私が心底より忌避する不醜の諸君にも、私の眷属の末端に加えてやらんでもない。

なんとって私は、優しい人間なのだから。

よろしい。

外見が美しい諸君も、おぞましく醜い諸君も。

両者思うところはあるだろうが、あなたたちは今を持って、「コンビニのあの人を手に入りたい」という共通の目標の下に結束する同士である。

その願いを本気で叶えたいと思うのならば、次号を待つが良い。

私は美しい人間も醜い人間も大っ嫌いだが、本気で何かに取り組もうとする人間は、その容姿に美醜に関わらず大好きなのだ。

決して損はさせないと、声高らかに宣言しよう！

……そしてヒソヒソ声で、決して得になるとも言えないよ、と誰にも聞こえないように予防線を張るのも忘れない。

004 意中のコンビニ店員と、懇意になる方法。(前書き)

文章の読みやすさを意識しました。

#### 004 意中のコンビニ店員と、懇意になる方法。

時として文章というものは暴走し、筆者の統制の下を離れて、まるで文章自体が意志を持ったかのように振舞うことがある。

しかし言うまでもなく文章に意思が宿って一人歩きなどするはずもなく、得てして筆者の手綱の握り方が甘いのが原因である。

前号の記事を読み返して私はそう思うとともに、少々反省した。

何の気なしに書いて、ろくに読み返すこともせず投稿した文章は、目も当てられないぐらい酷いものであった。確かに、意図的に文章をこね回してくどくしているのには相違ないが、それにしても本来の趣旨から外れ過ぎていたな、と猛省中である。

多少のひねりは文章におけるスパイスになるが、過量のスパイスを加えることはもは本来の料理とは変質した何かしか産み出さないとということを学んだ。

よって、今号では、必要な情報をなるべく的確に伝えることに主眼を当ててみようと思う。

それでは、早速、コンビニ店員を落とす方法の、具体的な内容について書き出そうと思う。

前号にも書いたのだが、私が伝する手法は、ざっくり言えば地道な作業である。ものの数分の間に、うおんちゅーな人間の心中をあつさりと手中に収められるような、魔法じみたものでは決してない。ゆえに、この手段を使って落とすのは、気の長い作業になるだろう。

この手段の過程に、派手さや瀟洒さはない。

どころか、終始地味である。

上記を了承した上で、それでもいいからとりあえず使ってみたい！  
藁にでも継りたい！ という切羽詰った諸君は、継ってみればよ

いのではないだろうか。

もしかしたら、握り締めた何の変哲もない藁から、赤い大きな薔薇の花が、咲かないとも限らない。

これは前提として、目標とする相手の性格、嗜好、性癖を充分に考慮しなければならぬことであるが、接客が大好き！ という一部の数奇な人間以外を除いて、基本的にコンビニ店員は客が大っ嫌いである。

客からの利益が自身の給与になる、なんていう当然の理屈は言われるまでもなく分かっているが、それでもなるべく客の数が少ない方がいいな、と考えている者が大半である。

なぜなら、コンビニの仕事の主は確かに接客ではあるが、それと同時にこなさなければならぬ作業も非常に多い。納品、品出し、陳列の整頓、清掃、その他諸々の雑務。

枚挙に暇が無いのでこれ以上は語らぬが、とにかく膨大な仕事量があるために、それを消化するためなるべく客に来て欲しくないと思っているのが、実情なのである。

そうだった理由から、ある意味ゼロスタートより厳しいマイナススタートの戦いであり、先の見えない戦いになることは、一目瞭然である。

そして、そんな実情があるために、基本的に店員は客に対して冷淡である。

どんなに愛らしい素敵な笑顔を咲かせていても、それはあくまで営業スマイルというものであり、決して特別な感情を抱いているわけではない、と断言しておこう。

稀に例外もあるが、それは飽くまで「稀」であり「例外」であるので、自分がそういう状況になっても決して勘違いをしない方が懸命であるといえる。

「客に対して冷淡」というのは、つまり「客に対しての関心が薄い、

無い」と言い換えても問題ない。

いわば、コンビニ店員は客のことを、「足が生えて金を落とすじやがいも」程度にしか認識していない、と考えてもらってよろしい。独裁国家の主たる人物が、民衆の命を蚊とも思っていないように。または尊大なる霊長類人間様が、耳障りな蚊の命を屁とも思っていないように。

それ以上にコンビニ店員は、客のことを何とも思っていないのだ。これは分かっているようで分かっていない人間が多い。

無関心は、時として憎悪の感情よりも、大きな障壁となる。

大前提として、これを頭に叩き込んでおいて欲しいのだ。

さて、怜悧で見識深い諸君の中には、最初に何をすべきか気付いている者もおるだろうが、そう、つまり「コンビニ店員に認知される」ことが最重要であり、最初の課題なのだ。

「その為には具体的に何をすればよいのだ、もったいぶらずはよ言え！」

と、私を罵り出す精神的早漏な人間もおるだろうが、話は簡単である。

つまり、対象となる人物が店に居る時間帯を把握した後、通えばいいのである。

「時間帯を把握した後、通うだつて？ それではまるで、ストーリーの所業ではないか！ この悪辣漢！ 新聞の購読代金を即刻返還せよ！」

と、怒れる群集よ、ひとまず鎮まりたまえ。

一見すると付きまといのようにも思われる行動だが、しかしなが

ら断言しよう。

人間の生活リズムというものはかなり規則性の高いものであり、それがコンビニやスーパーなどの生活に密着する類の店であれば、行く店、頻度、時間帯などはほとんど変わらないものなのだ。

これは、統計などの数字を元にしたものではなく、私自身の経験測である。

実際、コンビニで働き出して数ヶ月そこらを過ぎると、来客の八九割は見知った顔であり、初見の客というのは驚くほどに少ない。

これは、深夜の時間帯だからだということも噛んでいるだろうが、きつと日中でも絶対数が増えるだけで、割合としては変わらないと推測する。

現実はそのようなものである。

よって単純に、対象のシフトにあわせて店に通うようにすればよい。

しかし、単純な作業というのはしばしば時間を有するものであり、このへんは相手次第だが、はっきりと認知されるまでにどれぐらいの期間が掛かるか分からない。

己が忍耐力と財力との勝負になるだろうが、最初にことわったように、正攻法とは地道な作業なのである。

正攻法とは、正当な攻略の方法のことである。

何かしらの努力も無しに結果を求めような邪道よりは、多少は苦労してもその分見返りがある可能性の高い道を選ぶことを心よりオススメ致す次第だ。

更なる攻略法は、次号にて掲載す。

それでは諸君、意中のあの人の居るコンビニへと。

疾れ！

## 005 意中のコンビニ店員を、懐柔する方法。

前号にて、コンビニ店員を落とす第一歩目は、ずばり「コンビニ店員に認知されること」であると説いた。

そしてそのためには、ともかく対象となる人間の居る時間帯を狙って、店に通い詰めるということも言っただと思う。

けれど、闇雲に通うだけでは、いささか非効率である。

例えば、相手が他人に対して極度に無関心な人間だった場合、最悪、いつまで経っても認知してもらえない可能性すらある。これは非常に痛い。地道な作業であるだけに、なるべく効率的な手段を用いなければならぬ。

そこで使えるのが「アブソリュートパンパクト追随亡絶鮮衝」と「リメンバード不朽追憶欠片」の技法だ。

……。

正直に告白するが、私はいまちよつとにやにやしなからこの記事を書いている、むふふ。

そんなことはどうでもいいのである。捨て置け。

つまり、「インパクト」と「記憶の手助け」を駆使することによって、認知される過程が効率化するのである。

と、こんな言い方をしても諸君の頭上にクエスチョンマークが浮かぶだけであることは目に見えているので、順を追って説明したいと思う。

まず「インパクト」から説明しよう。

その言葉を額面どおりに受け取って、「気になるあの子に、僕の体の隅々まで見せちゃうもんねっ ふんすっ！」と、鼻息荒く早まった行動をするのだけは避けて欲しい。

それは確かに、認知という点に関してのみ言えば、パーフェクトであるし、この先三年は対象の人物、ひいては対象の店舗で語り草になることは間違いない。

けれど、恋の成就という点に関していえば、恐らく間違っているとは私を考える。

「インパクト」とは、つまるところこういうことだ。

効率よくコンビニ店員に認知されるために、「印象付け」をしよ  
う、ということだ。

では、そのために具体的に何をすればよいのか？

結論から言うが、レジでの会計の際に「ありがとう」と一言添えるのが、一見すると普通の行動のようであるが、一番効果的な手法である、と私は考える。

拍子抜けした方も多いかもしれないが、この結論、実はかなり理に適っている。

まず、「自分に好意を抱く人間に対して、同じように自分もその人に好意を抱く」というアレである。「ありがとう」と言われても何も感じない例外的な人間も居るには居るだろうが、少なくとも悪い気分になる人間はまず居ないのだ。そして大半の店員が、少しほっこりとした嬉しい気持ちになること請け合いである。

具体的な例を出すと、ちよつと氣勢の強い土方のおっさんが、「これ温めて」「袋、別にしといて」「あと煙草、いやそれちやう。それや、それ」「カートンでくれや」と矢継ぎ早に注文して来たとして、当然店員の心情的には「なにこいつめんどくせえ!」という具合であるが、そのおっさんが帰りがけに満面の笑みで、「おう、ニイチャン、ありがとうな!」なんて言ってくれた日にはもう、今まで面倒くさいと思っていた自分が恥ずかしくなつて、全力で「ありがとうございました!」と返してしまうのが人間の性である。

このように、シンプルであるが、有効な手段である。

むしろ、シンプルゆえに効き目が分かりやすいと言えるかもしれない。

更にこの手法の根拠を裏付ける理論として、「不良がたまに良いことをすると、すぐく善人に見える」というアレも関わっている。

どうということかというところ、客というのは「ありがとう」という人間の方が少ないものである。「ありがとう」と言うことが習慣付いている人間には驚くべきことかもしれないが、実質的比率は7:3ぐらいで言わない人の方が多いのである。

そうすると店員の中で、「客」「ありがとう」を言わない、という図式が成り立つ。

つまり、「ありがとう」が無いのが前提であるがゆえに、不意の「ありがとう」に図らずもインパクトを受けるわけである。

そして、である。

これは重要なことではあるが、一口に「インパクト」と言っても良いインパクトと悪いインパクトがあるのは言うまでもない。

例えば、コンビニの店内で常習的に騒ぎまわる青年が居たとする。認知の点で言えば、確かに覚えてもらえるだろうが、それは悪い意味での認知になるのである。

もちろん、恋の成就など望むべくはずもない。

それどころか、店員が「意図的に誤って」アイスなどをレンジでチンされかねない。

その点、「ありがとう」というのは、「インパクト」を与えて認知を助長する、且つその認知は「良い認知」なのである。

これを使わない手はないだろう、読者諸氏よ。

更に応用として、レジに品物を出す際に、バーコードを上に向けて精算の手助けをする、という高等技術も有るが、これは初心者に

はオススメしない。

高等技術であるがゆえに使う人は滅多にいない。なので認知に直結するにはするが、バーコードを把握していなければ出来ない芸当である。多分、私ですらスムーズに行うことは難儀であると考える。更に、バーコードを上向ける際にまごついてしまつては、挙動不審な印象を与え逆効果である。

よつて推奨はしない。

但し、缶コーヒーだけ買つて行く、などの際にさり気なくバーコードを上向けて差し出すなど、使い方次第では効果靦面な場面も多々あるので、そのあたりは自分の頭でよく考えて、臨機応変に対応してもらえれば幸いである。

さて、次は「記憶の手助け」の項目である。

これも、本質的には「インパクト」と同じであると言つていい。但し、「インパクト」が自分から率先して印象付けするという能動的な行動であることに対して、「記憶の手助け」はあくまで店員に印象を付けられるのを助けるという、どちらかといえば受動的な行動であるということである。

これも、やることは実際シンプルである。

例えば、なるべく購入する商品に類似性を持たせることである。細かい銘柄まで統一する必要は無いが、例えば日用品類を買うようにしておけば、「あの人は生活雑貨をよく買う人だなあ」だとか、チョコレートや和菓子などを買うようにしておけば「たぶん甘いものが好きな人なんだなあ」だとか、店員の方で勝手に印象を付けてくれるのである。

そしてその際たるものは、なんといつても煙草である。

煙草の銘柄をよほど変えない、もしくはマイナーな銘柄を選択しない限り、「この人」煙草の銘柄」といったような印象付けもされるわけである。

個数と銘柄を固定しておけば、通い詰める内に、あらかじめソツとレジにその煙草が置かれている日が来るかもしれない。そうなれば、認知は大成功と言ってよいだろう。

「記憶の手助け」の異なった例として、服装などもその範疇に入るかもしれない。

別にお洒落である必要はない。お洒落であつた方が印象は良いかもしれないが、少なくとも認知の点にのみ絞つていえば、服装にも統一感を持たせておくことが重要なのである。

例えば仕事帰りを装う作業着や、スーツ、もしくはジャージ、小綺麗な私服など、「この服装」「という図式を成り立たせることが大事なのである。

但し、「記憶の手助け」というのはどちらかといえば副次的であり、もつぱらの主砲は「インパクト」であるということは、言わずもがなである。

さて、今回は長くなったが、これは基礎である。

ただの基礎ではない。

会計のときに「ありがとう」ということなど、当たり前のことであるし、ここにあることを行ったからといって、他の客に優越して頭が抜きん出るということはたぶん、恐らくない。

やっとスタートラインである、ということを自覚して、慢心しないようにしてほしい。

また、基礎だからといって手を抜くのは、もちろんいけないことである。

応用は、基礎を知るが故の応用なのだ。

基礎無くして、まともな家が建つはずもなし。

ましてや、客の立場からコンビニ店員を落とすという、東京スカイツリーを建設するどころの難易度ではない。

大日本へヴンメタセコイアを建てようするようなものだ。

基礎どころか、地盤からすっかりしていないと、建つものではない。

読者諸氏、くれぐれも驕慢せず、かといって地味ゆえの苦痛に退廃することなく、気を引き締めてことに当たってほしい、と私は切に願う。

コンビニ店員を落とす方法は、次号で締めとなる。

そこに私の持ち得る限りの、智謀策略、叡智謀略を注ぎ込もうと考えるので、是非目を通されたい。

## 006 意中のコンビニ店員と、寝具を共にする方法。

小説は、文章を飾り立てることで香りが引き立ち、味わいが深くなる。

しかしながら、評論や、もしくは単純なメモ書きなど、人に伝えたい何かがある場合は必ずしもそうだとはいえない。むしろ簡潔な文章で、事象を正確に伝えた方がよい。

今号においては、私は文章に対する装飾をなるべく施さないつもりだ。

文章自体に対する楽しみよりも、それ以上に伝えたい何かがあるからだ。

まず始めに、前号のおさらいを簡単にしよう。

コンビニ店員を落とす第一段階は認知、つまりコンビニ店員に自分を覚えてもらうこと。

そのためにすべきは、対象の人物のシフトに合わせて店に通い詰めること。

そしてそこで更に役に立つのが、会計の際に「ありがとう」と言うことと、なるべく毎回買う品種に統一性を持たせること、だった。

ちなみにこれだけ行えば、店に行く頻度によるが、一月あれば顔を覚えてもらえることはほぼ確実だと断言する。

一月で、下準備はおおむね完了するわけだ。

ここからが問題だ。

元も子もないことを言ってしまうえば、ここからは個人のスキルによるとしか言いようがない。何故なら、ここからは積極的に店員と

コミュニケーションを取って行く段階であり、私はあくまで最低限の作法程度しか教えることができない。

いわば、個人の能力に付随する、補助的な何かしか教えうることに無いのだ。

コンビニ店員シリーズの比較的初期で、「絶対に落とすことができる」なんて大言壮語を吐いておきながら情けない限りであるし、読者諸氏には申し訳ない。

けれど、人生の大きな選択なんていうのは、結局自分以外が決めようもないし、決めるべくもない。そしていかなる選択の結果も、全てが自己責任になるのだ。

再度申し上げるが、私は補助的な何かでしかないのだ。

だから、私の記事を読んで事態が好転しなかったり、または悪転したとしても私は悪くない、貴方が悪いのだから、くれぐれも私を叩かぬように。

顔を覚えてもらうという下地が出来たいま、次に行くべきは、客：店員ではなく、人：人のコミュニケーションである。

恋愛において、立場だとか階級なんていうものはいつの世でも阻害の要因でしかなかった。だから、それを取り除いていかねばならない。

まずは意中の人間をよく観察しよう。

彼、彼女はどんな人間であるか、大雑把な輪郭だけでもいいからとりあえず知る。具体的に言えば、自分以外の客に対してどういう対応をしているか、などだ。

そしてそこから、敬語で丁寧にかけるか、それとも砕けた口調でフランクに話しかけるか、などの細かい取捨選択をすればよい。ある程度、自分と相手との会話像みたいなものが出来上がったなら、いよいよ実践の時だ。

ここで幾つかの注意点を書いておくので、留意してほしい。

当たり前の話だが、レジが混雑しているときの店員には心の余裕がない。ましてや会話に藹々と臨めるわけがない。客を捌くことだけを考えているのだから、全うな会話が成り立つ見込みなどサラサラない。

ゆえに、人が少ないときを狙うのが正解だ。

話しかけるタイミングとしては、自分の会計中、もしくは会計後が安全牌だろう。

いわば、自分の会計時というのは、自分の持ち時間である。

その時間は、自分だけに意識が向けられるし、そのときに話しかけられてムツとする店員はほとんどいないだろう。

逆に、品出しの最中などに話しかると「仕事の邪魔をされた」と認識する店員も出てくるだろうから、おすすめしない。

次に、話しかける内容である。

言わずもがなだが、いきなり恋人は居るのかなどと不躰で直接的すぎる質問をしてはいけない。いたずらに警戒を高められるだけで、一抹の得もない。

なるべく、互いの私情に踏み込まない無難な内容が良い。「会話をする」という事実のみがこの時点では重要視されるのであって、内容はどうでもよいのだ。

よく無難な会話の一例として、「天気や趣味の話が良い」などと言われるが、コンビニ店員との接触に関して言えば、どちらもあまり好ましいとは言えない。

よっぽど珍しい天気だったならまだしも、いきなり見知らぬ人間に「今日は良い天気ですね」などと言われても、はっきりいって建物の中で仕事をする店員は、返答に困るだけだ。

趣味の話に関して、およそコンビニの会計中にするには相応しくない。

ではどういふ話題がよいのか。

敢えて、客から店員に歩み寄ればいいのだ。

つまり、その店や店の商品に対する話を振ればいいのである。

これは一例であるが、おにぎりセールをやっていたなら、「これはいつまでですか」とか、「こういうセールってよくやるんですか」とか、そんな内容で良いのだ。

店員に悪印象を抱かせることなく、「会話をした」という結果を作ることが出来る。

しかしながら、一つの質問に対して一つの返答で会話が終わってしまつては、いささか「会話を重ねた」とは言いがたいので、プラスアルファで何か欲しいところなのだが、ここからは個人のセンスの見せ所であるので、私が特筆すべきは、あまり無い。

というより、これ以上書くことはない。

味気ないかもしれないが、私書きつることは以上なのである。

結論から言うと、意中のコンビニ店員を抱けるか抱けないかは、あなたの手腕次第ということになるのだ。

完結。

解散。

しかし、これにて指南終了！ では余りにも投げっぱなしジヤーマンというが無責任であるので、以下に会話モデルを書くのでそれを参考にしつつ、改変するなりして使って頂ければ幸いだ。

以下、貴方はA、コンビニ店員はBと称す。

B「いらっしやいませ、どつど

「 が一点 ××が一点……」

A「あれ、おにぎりって、いま100円なんですか」

B「あ、はい。今はセール中なので、全品100円なんですよ」

A「そうなんだ。こういうセールってよくやってるんですか」

B「そうですねー、2ヶ月に一度ぐらいやってますねー」

A「そっか、ありがとうございます」

B「いえいえ。それではお会計、 円ですねー」

A「……じゃあ 円をお願いします。袋は一緒にいいです」

B「ありがとうございます。では、 円お預かり致します」

「 円のお返しになります。ありがとうございます」

A「ありがとうございます。……ところで、しりとりしませんか」

B「えっ」

A「しりとり、しませんか」

B「は、はぁ……」

A「では自分から、しりとり」

B「……リス」

A「雀の涙」

B「だ、……ダリア」

A「アナコンダ」

B「……」

） 2 hours later ）

A「福建省育ちのジャイアントパンダ」

B「だ、だ、……すみません、もう思いつきません」

A「嘘はいけねえぜ、お嬢ちゃん。だ、から始まる言葉が、まだ一つだけ残ってるだろう？」

B「う……、でもそれは……」

A「別に、言いたかないならいいぜ？ けどよ、お嬢ちゃん。その赤く火照った頬と、荒い息遣い、口に出さなくても言っちゃってるようなもんだぜ？」

B「っ！ このヒトデナシ！」

A「おいおい、飯にも客に対して、ずいぶんな物言いじゃねえか。  
ふん、そういうことなら、帰らせてもらっよ」

B「！！！！ 待って下さい！ ……言います、言いますから！」

A「最初から素直に言ってるじゃよかつたんだよ。じゃあ、もう一回  
やり直すぜ。 ……福建省育ちのジャイアントパンダ」

B「……」

A「ほら、早く言いなよ」

B「……だ……」

A「聞こえねえなあ！」

B「だ……、だ……、……抱いてっ！」

## 執筆後記

失敗した、と私は思った。

私は、真面目で優しすぎたのだ。

この意中のコンビニシリーズを書くにあたって、当初、私は読者に対して何一つとして有意義な情報をもらすつもりはなく、ただひたすらに皮肉に終始するつもりだった。

ところがだ。

何故か途中から、「少しでも自分の体験を生かした有意義な情報を、読者に提供したい」という出所のわからぬよこしまな気持ちが自分の中で芽生えた。何故か、と言ったが、それは一重に、私の善良で優良たる人柄に拠るものだろう。

そしてその気持ちは、自分の知らぬところでムクムクと肥大し、遂には私の作品にまで闖入を許すに至ってしまったのだ。

そのせいで、私の小説は大惨事である。

「本当に使える技術」を読者に提供するという、陰惨たる善人ぶりを衆目に曝すという醜態だ。

保険金殺人を犯して指名手配中に警察に射殺された父も、私の恥ずべき善人ぶりに草葉の陰で血の涙を流していることだろう。

嗚呼、情けなし。

ギリギリのところまで踏みとどまって、作品をぶち壊すに至ったが、付け焼刃にすぎん応急処置である。全体としてみると、有意な小説に仕上がってしまったことに変わりはない。

哀感遣る方なしであるが、終わったことを愚痴愚痴と言ってもしょうがない。

コンビニシリーズは今号を持って終わりである。

次回からはまた、更に精進して中身の無い小説を書くことに尽力する次第である。

006 意中のコンビニ店員と、寝具を共にする方法。(後書き)

ひどいシリーズであった、と言わざるをえない。

次回から、ちゃんと日々の雑記風味にできればいいと思います。

007 蟲毒患いし、わがポンポン（前書き）

今回は、下品な表現がありますが、  
そういうのがお嫌いな方もご遠慮せずに読んでください。

また、文章も実験的な面が多いので、  
いつも以上に読み苦しいかもしれませんが、  
他の小説を読むぐらいならこれを読んでください。

## 007 蟲毒患いし、わがボンボン

一週間ほど前のことである。

私は、あまり幸せではない起床をした。

アラームのつんざく悲鳴に起こされるのも、第三者の手に揺すられて起床を余儀なくされるのも、安眠を貪っていたい人間にとってはあまり幸せではないだろう。

けれど、この日の私の起床と対比するならば、それさえも相対的に幸せである。

その日、私は腹の中で何かめくらが蠢く厭な感触で目を覚ました。

絶対的に睡眠量が足りていないはずなのに、起きた時点ですでに頭はこれ以上になく覚醒しており、そのせいでなおさらその不気味な感触が明瞭に伝わってきた。

「やれやれ、前夜に何か悪いものでも食べたかな」と思って記憶の糸をほいさほいさと手繰り寄せてみたのだが、どうにもマトモではないものを咀嚼した覚えはなかった。

ならば外的要因か、と違って寢床から辺りを見回すが、予想に反して窓はガツチリと閉まっていたし、脱ぎ癖のある自分にしては珍しく服も着たままだった。

いよいよ、私はゾツとした。

それと同時に、腹の底に溜まる何かしらも、ゾゾゾツと動いた気配がした。

人間というものは、影無き恐怖に滅法弱い。

たとえば古来より人は、幽霊や神隠しなど、正体の掴めぬ超自然的なモノに怯えて暮らしてきた。

だが、文明や科学の発展により、幽霊の正体はプラズマであると

され、神隠しが悪意ある人間の仕業だということが露見すると、そこにあつた恐怖は一気に消えうせ、いまでは幽霊なんぞ滑稽の代名詞にすら成り下がってしまった。

しかしながら、である。

世界中で遍く噂あまねされている謎が、発達した文明の力によって次々と解き明かされている近世、そんな今だからこそ、まだ残る数少ない謎に、人々は尋常ではない恐怖を感じるのだ。

そしてそれは、先日の私にとつても例外ではなかった。

日常的に怪異の根源のほとんどを「プラズマだ」と言い張り、「神も悪魔もいるか」と聖書でケツを拭き、「くたばれロリコン」と神隠しを擲や擲ゆし、超自然的現象の悉ことごとくを唾棄たすべきだと考えていた私だったが、いざ自分の身に降り掛かっただ途端に顔面蒼白になったのだから、愚かであること恥辱の極みである。

「なんぞこれ。お腹の中で、なんかうねうねしとる。まるで、悪鬼天魔の所業だ。主よ、助けたまえ！」

こんなときだけ都合良く神に祈ったりするが、生憎その神様は自分の手でケツにあてがってしまった後だ。

ケツ神様が、なんの天恵てんけいおんえき御益をもたらししてくれるはずがなかった。

結局、私はその後三十分ほどのた打ち回った。

のた打ち回っているうちに、いつの間にか再び眠りに落ちていた様子で、次に起きたときに恐る恐るお腹を触ってみたが、何の異物感も無い、平常運転のポンポンであった。

「結局、あれは何だったのだろうか」

疑問が頭の中に残りつつも、友人との約束があつたので、身支度を済ませて家を出た。

友人宅に向かう道中にあつた教会の扉を、思い切り蹴り付けておいたことは言うまでもない。

一方的な逆恨みだと罵る者もいるかもしれないが、私はそれを否定しない。

ただし逆恨みだろうと、正恨みせいだろうと、恨まれる方に落ち度があるのに相違ないのだから、よつて何の福音も届けてよこさなかつた教会が悪いのである。

私が最初に、神様をケツなぐで慰み者にしたとか、そんなことは知らん。

関係ないのである。

神なら平等に人を愛せ、とむしる説教をくれてやりたい心境ですらある。

とにかく友人宅へ向かう道中も、幼女が好きでいずれ神隠しを行わんともつかぬ友人との談義の間も、そこから帰宅する道沿いでも腹に違和感が甦よみがえることはなかつたので、私は安心してきつていた。

帰宅してからバイトに行くまで数時間あつたので、今朝無駄に早く起床した分の睡眠時間を取り戻すべく、私は再び寢床に入ったのだつた。

賢き明察をなさる読者諸氏なら、次の展開は読め読めであろう。

しかしながら、空想小説ではベタとされる展開も、それが現実のものとして眼前に展開されるとなれば、それはそれで恐ろしい、それだけで大いに恐ろしい。

推察どおり、私は再びあのゾゾメキによつて、眠りの淵に沈み込んでいた意識を引つ張りあげられた。

しかも、前にもまして相当にひどい痛みだつた。

腹の中に野犬がいて、臓腑を喰い散らかしているかのように、鋭い多角的な痛みだった。

産みの苦しみ、という言葉がある。

たとえば出産に関して言えば、その痛みは相当なものであり、男が体験すると死ぬとすら言われている。けれど出産は、産んでいる故に痛いのである。産んでしまえばなんということはない。

痛みのベクトルが違っけれど、腹痛も同じである。排泄したいがために痛いのである。これもまた、産んでしまえばなんということはない。

では私も産んでしまえば、痛みから解放されるだろうと、そう考えるのは安直なのである。

そのときの私の痛みは、明らかに異質なものであった。

何も出る気配が無かったのである。

痛みを体内から排出する術がなかったのである。

死ぬまでおさまらないんじゃないだろうか、痛みから解放されるべくは死ぬしかないんじゃないだろうか、そう思っていよいよ絶望の岸壁に立たされていた私だった。が、なんとも不思議なことに、バイトに行く直前の時間になると、痛みがフツと引いたのである。

私は、痛みが消えたことに安堵するよりも、むしろその見計らったかのような引いた痛みの波に恐怖を隠しきれなかった。

いよいよ、超自然的な力がはたらいていることを、信じられずにはいられなくなった。

冒流に冒流を重ねた神の呪いかとさえ、真剣な心根で疑ったのだ。

ともかく、刻々とバイトの時間がせまっていたので、私は原付に跨ってその車体を走らせた。

バイト中、私は戦々恐々であった。

すでに、一日の内に二度起こった天変地異は、明らかに私の体力を磨耗まもつさせていたし、いつ襲来するともわからぬ三度目のそれを考えるだけで、精神的にも疲弊せざるをえなかった。

バイトの節目節目でビクついていた私だったが、恐れて気を張っているときほど、恐るべき事態は起こらないことが多い。やがてバイト中にはどうやらあの痛みは来なさそうだと勝手な推測をして、私は徐々に安堵しつつあった。

いま、馬鹿だ、と突っ込んだ者。

正解である。

ホラー映画の筋書きとして、緊張から緩慢な場面に転じた後、弛し緩かんした空気のところを突如として畳み掛ける、というのは基本中の基本である。

無防備は、付け込むためにあるのだと言っても過言ではないのだ。但し、ホラー映画のプロットが現実世界に応用されること自体が異常なので、私が安堵したのは責めるべくもない話ではあるのだが、人間の体というのは本能に忠実なもので、安心の境地に立ちつつあった私は、ふとその日まだ何も口にしてなかったことを思い出して、急激な空腹に襲われたのだった。

幸い、ラーメン屋であるので、食べるものには困らない。

私は突如として、オーダーが入ったわけでもないのに麵場に立つて、さらには店のメニューにはないオリジナルのラーメンを作り出した。

けれど、なにもトチ狂ったわけではない。規定の三十分休憩を貰って、自分が食すためのラーメンを作っただけなのである。

全然余談なのだが、基本的に飲食店のアルバイトというものは、オリジナルメニューの開発に勤しむものである。ゆえに、知り合いの働いている飲食店に行つて、「お前のオリジナルみたいなん作つてよ」というのが一番美味しいものを食べられる可能性が高い。

閑話休題で本筋に戻ろう。





かといってこうして便器に座っていても仕方がなかった。

私は途方にくれた。

ここで粘っていても意味がないけれど、便所からわざわざ出るのも億劫だったのだ。

何もかもを諦めたくなつたのだ。

ふとその瞬間。

つと、突然にである。

腹に、違和感が。

戻る。

それは。

けれど。

はじめは虫かと思つた。

あいつらが、いよいよ孵つたのかと。

ぴちやり、ぴちやりと。

尻を這うようにして垂れる。

虫が、あいつらが。

けれど。

耳を澄ますと、違った。

遠く微かに聞こえるそれは、歓喜の音であつた。

ついで、地響きのような、腹の胎動。

それは生命の強さそのものを表現したかのように。

私の腹は強く、強く揺れた。

地鳴りがドンドンと勢いを増して、それに呼応するかのよう  
に私の腹もドンドンと、太鼓を打つかのように響くような  
感覚が私を支配した。

響く。揺れる。響く。揺れる。

呼吸のように規則的に繰り返す。

そして。

全ての音が、止まる。

つい昨日のことである。

私は、あまり幸せではない起床をした。

やけにけたたましいアラームを過剰な力を以って止め、寝返りを打つ。

むつくりと自然に起きるのを待つ以外、何かしらの介入によって起こされるのは、誰しもにとってあまり幸せとは言えないだろう。

けれど、あの日の事を思い出すと、私はこれから先は永劫に、起床の際に不幸だと感じる日はこないかもしれないな、と思った。

あの日、一日の内に私を三度も襲った新種の蟲毒は、三度目にしてその本性を表した。

なんのことはない、単純な排泄物、大便、うんこ、クソ、本質的には同じだが、呼称は数あるので好きによんでくれてよい、それであった。

しかし、なんと形容すればよいのだろうか、強いていうなら物量、密度、体積、容積、どれを取ってみても、ただの排泄物の域を凌駕していたのだ。

いわば、ただならぬクソだった。

汚い話になるが、通常の排泄をブリブリと形容するのならば、そのときの私のそれはブリブリブリブリブリブリブリくらいはあったとおもっ。

道理で、腹の中を虫の大群が行進するかのような幻影にも捕らわれるはずである。

北欧神話に、ヨルムンガンド、別名をミッドガルドの大蛇、世界蛇とも呼ばれる巨大な蛇がいる。悪戯好きの神ロキと、巨人のアングルボアの間にも生まれた彼は、生まれてすぐに海の底にうち捨てられるのだが、やがて海底でミッドガルドの周囲を取り巻くほどの大きさに成長し、更には自分の尾を加えることができるほどの大きさに成長する。

さて。

あの子の自分は、さながら成長しきった姿のヨルムンガンドを出産するかの如き心持であった。

排泄が始まった瞬間に私は冷静さを取り戻して、「このサイズだと便器が詰まるやもしれぬ」と考え、クソを出しながらにして水洗レバーを捻ったのだが、実に三回レバーを捻ってその水が流れ終わるまで、クソが止め処なく出続けたのだから、恐ろしい。

今にして思えば、あれはほんとうにヨルムンガンドだったのかも知れないとおもっ。

兎にも角にも、斯くして私は、蟲毒という名の幻覚から醒めたわけだ。

しかしながら、実をいうと、いまだにあのヨルムンガンドの原因はわかっていない。

あの日の前日、私はキッチンと排泄行為をしたはずだし、悪いものを食べたおぼえも、やはりない。

では、あの物量のクソは、どこから湧いて出たのだろうか？

はたまた、本当に腹の中に蟲が湧いていて、それが排泄物へと姿を変えたのだろうか。

「馬鹿な」

いつの間にか、私は以前と同じように超自然的現象に懐疑的になつていたので、信じるべくもなかった。

では、なぜ？

真相は闇である。

闇は、探らないに限る。

そして私は現金な人間であるゆえに、原因などどうでもよく、とりあえず解放されたという状況こそが大事なのであった。

なので私は、上機嫌でバイト先を後にすることが出来たわけである。

帰りしなに、もうすぐ来たるクリスマスに対する憎悪の前借り分も含めて、教会の扉を三度四度蹴り飛ばしたのはいうまでもない。

その瞬間、ナニモノかが私を背後から、凍てつく様な視線で突き刺すのを感じた気がした。

けれど、私は神の存在なんて信じないのだ。

## 008 「なんにもない」が、ここに

雑記である。

元々、淡々と日常を綴るつもりだったのに、二話目以降、内容と文章量ともに少し膨らませ過ぎたというか、作者自身が自分の文章に対して食傷気味である。

こういう風にたまに、時折、しばしば、いえいえもはや日常的に見られる文章の暴走行為は、ひとえに作品のプロットを作っていないという理由に帰結するだろう。

しかし、それで責められても困るのだ。

プロは小説を書く際に、恐らく必ず全員がプロットを立てるだろう。

しかしながら、仮に文章のプロといえども、日記を書く際にわざわざプロットを立てる人間がどれだけ居るだろうか。

そういうことである。

これも言わば日記みたいなものなのだから、プロットを立てる必要はないのだ。

日記であるために、プロットは立てない。

これは当たり前のことであるし、この前提に反論しようものならば、作者はガムテープをむんずと掴んで貴方の家に赴かなければならなくなるので、この点に対しての反論は遠慮されたし。

問題は、この日記を書くにあたっての当初の目的とこの作品の存在意義だ。

そもそもこれは、冒頭でも説明したようなしてないような曖昧な気もするが、文章の練習のために連載を始めたようなものだ。

少なくとも、毎日文章を書くという点にのみ絞って考えれば、内容が如何であれ悪いことではない。

けれど、文章の練習とは、小説家を目指す以上は小説の練習とも言い換えることができる。

小説の練習なのに、プロットを立てる必要が無いジャンルを選んでしまったのは、大失敗と言うしかない。しかもこれに気付くまでに八日も要した自分に、むかつ腹である。

思わず壁を殴ろうにも、業腹しほつぽの度に壁を殴ってきたので壁はもはや百戦錬磨の威风、端的に言えばすでに穴だらけなのであったからして、もはや殴る壁もない。

「いったいぜんたい、どういっつ見か」

攻め立てようにも、考えたのも自分であるからして、鏡に向かって問いかけるしかない。

もちろん、鏡の中の自分に返答を望むべくもない。  
どうすればよいのか。

もう一つ、このジャンルを選んだことに関して失敗がある。

作品とは、それがどれだけ支離滅裂で無茶苦茶な内容であっても、まずは完結させることに意味があるのだ。

「百の作品を書き出すより、先ずは一つを完成させなさい」

そんな言葉も有ったり無かったり。  
つまりね。

日記は、どうやっても完結しないのだ。

それこそ、作者が不慮の事故か、猟奇殺人事件の末端になるか、いずれにせよ命を落として書くことができない、という状況まで完結しないのだ。

「では、僭越ながら申し上げるが、死ねばよいのではないかクソ作者殿」

そんな声も聞こえる気がするが、私は耳を塞ぐ。

死んでしまえば元も子もないではないか。

と。

こんな風に書くと、読み手によってはただの愚痴の羅列に見えるかもしれない。

「やはり、いまずぐ死ぬがよいよクソ作者」と思うかもしれないけれども、残念ながらそれは、貴方が文章の本質を見抜けない浅はかな人間であることの証明である。赤面して枕に顔をうずめてジタバタするのがお似合いだ。

クソ作者曰く、カス読者、といったところである。

なぜならば、懸命な諸氏ならば言うまでもなく理解されているところだろうが、何も私は愚痴に終始するつもりで筆を取ったのではない。

人間は、必ずしも立ちふさがる問題を乗り越えようとする、素晴らしい生き物である。

私に關してももちろん同様である、どこるか、普通の人間以上に熱い闘志を抱き日々の鍛錬をこよなく愛する人間なのだ。

邪魔な障壁を叩き壊そうとしないわけがない。

あくまでまだ「ここに、こういうという問題があります」と提起した段階ではない。

当然の如く、次には「それでは、その問題をどうやって解決しましょうか」という、前向きで建設的な気持ちの良い快文が続くわけである。

……どうしよう。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

解決方法が見つからない。

どうしようもない。

作者は、読者の期待に沿う形で誇り高く自決する気もなければ、連載を途中で投げ出すような醜態を曝すつもりもない。かといって

日記という形式をいまさら変える気もなければ、ましてや日記を書く上でプロットを立てるなどという愚の骨頂を犯すわけ気にもならない。

うづむ。

インターネット上の無料サイトに小説形式の日記を投稿する彼は、苦悶に表情を歪めた。

一体どうすればよいのかと、誰にも聞こえない悲鳴を上げ懊悩おつのうした。

電子の海をもがいてみても有用な情報は見つからず、彼は頭に手をあててしゃがみこむよりなかった。

時の流れは如実であり、かつ残酷である。

彼が呻吟しんげんし始めてから、時計の針は明々と悪意を見せ付けるかのように何歩飛ばしかで進んで、今では夜も更け丑三つ時を示しつつあった。

そのときである。

彼の頭の中で、何かが一閃した。

彼の断末魔にも似た祈りは、もしかするとどこかの神か、またはそれに等しい存在に届いたのかもしれない。

とにかく彼は立ち上がり、飛び掛かるようにして学習机を漁り散らかすと、やがて太く赤い書物を取り出してニタリと笑った。

鮮やかで堅固な赤い表紙には、これまた綺麗な金色で、「三省堂国語辞典」と印字されていた。

さきほどとは打って変わって、彼は落ち着きを取り戻していた。

余裕綽々といった具合に口角を緩ませながら、すこしづつページを捲る。

やがて、彼の目は辞書の中の一点に注がれ、ページを進ませる手が止まった。

私は、見つけたのだ。

日本語には便利な言葉が沢山ある。

しかし、私の現状に、これ以上までに有意義な言葉は存在しない。  
溺者に浮き輪である。

現状をどうにかしたいという意志を持ちながらに、打破すべき手段が見つからないときの奥の手として、私はこれを用いようとおも  
う。

臭いものに蓋をする 【抜本的な対策を講じないで、不都合な事態を一時的に隠そうとする】

009 LIVE、ライブ、生きる(前書き)

完全に個人的なライブレポになってしまった。  
すみません。

## 009 LIVE、ライブ、生きる

あの隔絶された音の有象無象の世界へ足を踏み入れたのは、実に一年ぶりのことだった。

ライヴハウス。

馴染みのない人間が想像するのは、赤錆びて重厚な扉を押し下へ階段を潜る、そうするとそこにはミラーボールに照らされて踊り狂う魑魅魍魎が跋扈する、まさにアンダーグラウンドといった世界かもしれない。

けれど、私の住まいから最寄にあるライブハウスは外観こそ煤けて黒がかった灰褐色の容貌だけれども、中に入ってみれば瀟洒さの漂う造りになっており、さらにいえば地下通路ではなく上り階段を登ることで異世界に到達する。

しかしながら踊り狂う魑魅魍魎は確かに存在しているので、当たらずも遠からずな想像であると言っておこう。

私は基本的にライヴハウスの雰囲気が大嫌いだ。

といえば語弊があるかもしれないが、少なくとも私が過去数十度と足を運んだイベントにおけるライヴハウスは、総じて憎悪の対象である。

というのも、ライヴハウスに入ってすぐ目に付くのが出演者同士、もしくはそれに常連も加わった身内の馴れ合いである。扉を潜って入ってきた新顔には、もれなく彼らの好奇の視線が一手に刺さる。

これは由々しき事態であると、私は思う。

仮に初めてライヴハウスに行く者がいるとしよう。

初めてなのだから、もちろんライヴハウスというのがどのようなところであるのかは、架空の話から推察するなり想像を膨らませるなりするしかない。期待や興奮もあるだろうが、そこには確実に不

安や心配も入り混じるわけである。

そんな中潜った先にあるのが、すでにライヴハウス常連の重鎮ですよ、と得意気な顔をした何やら派手な連中からの視線なのだ。

こんな非道い洗礼を、なぜ娯楽のために来たはずの空間で受けねばならないのか。

さらに悪夢は続く。

バンドとバンドの演奏の間に、次のバンドのためにステージ上をセッティングする時間があるわけなのであるが、その間も、やはりすでに知り合い同士の身内で固まってしまったために、新顔の入る隙間がない。

孤独である。

これほどまでにない疎外感である。

頻繁にライヴに行っていた頃は、よくこの疎外感に苦しんだ。

あれだけ必死にチケットを売り捌こう、人を呼ぼうとしていたにも関わらず、いざ出向いてやれば「おう、来てくれたんや。ありがとう！」とそんな安易な言葉だけでまるで謝礼の全てを済ませたかの如く再び身内の輪に戻る彼ら。

取り残された自分の惨めさたるや、ない。

確かに私が社会的な人間でないというのも理由の一つである。大きな理由である。それはわかっている。

けれど、だからといって何故好意で足を運んだ私が、これほどまでに惨めな思いをしなければならなかったのか、思い出すだけで苦虫の味がする日々である。

そんなこんなで私は、強引且つ乱暴な手段でチケットを売り捌こうとしていた彼らが、卒業式のように年を追ってバンドを引退していったのを機に、ライヴから長い間離れていた。

しかしながら今日、久しぶりにライヴハウスに足を運んだのだ。

それは、私の友人、夢追い人である彼が久しぶりに地元のライヴ

ハウスで演る、ということを知ったのと、いままで誘われる度に無碍に断るということが続いていたのでそれに対する罪悪感も少しはあっただろう、とにかく彼を見るためにライブハウスに言った。

久しぶりに入った箱の中は、やはりかつてと全く同じ雰囲気だった。

「同族ではない異物である何か」を見つめるような視線は、例に漏れず私の瞳を突き抜け、直接に脳髓を突き刺した。

けれど、私は以前のような不快感や疎外感をおぼえることはなかった。

きつと、その視線を放つ彼らが自分より幾分か若かった、という点で精神的な余裕が出来たからだと思う。とにかく、それはよい兆候だと思った。

悠々とドリンクを飲みながら、始まるまでの間に煙草を呑みつつ回りを見渡すと、やはり若年層の者が多かったため、逆に場違いで恐縮するような気恥ずかしさに襲われもしたが、それでも以前のようにならぬに喰い散らかされそうになるような恐怖感はなかった。

そうしているうちに、ライブの幕は開く。

一つ目のバンドは、スリーピースのギャルバンドで、一見すると女子高生のようにであった。

というのも彼女らは制服を着ていたのだが、そのデザインがてんでバラバラで尚且つ学校で指定されているものにしてはデザインがいかにせん派手であったので、女子高生ではないのかもしれないと思っただけだ。

案の定、大学一回生の音楽部であり、制服は嗜好になぞらえて着用しているだけだったので私の推測は正しかったわけだが、技量の

みに着眼すると完全に高校生のそれであって、大学生の水準には程遠かったため、私の推測はやはり外れていたとも言えるかもしれない。

とにかく、一つ目のバンドについて特筆すべき点は、何一つとしてなかった。

私は肩を落とした。

以前までは、疎外感によって鬱屈することの多かった反面、どんなに稚拙な音でも楽しんで体を揺らすことが出来ていたのだが、今の私にはそれが出来なくなってしまっていたのだった。

つまらない。

率直な感想だった。

感情の揺れに同調するかのようには踊り狂っていた私はいずこへ。

二つ目のバンド。

同年代ぐらいの男のスリーピースバンドであり、ジャンルで言えばオルタナティブロックか、もしくはガレージロックに近い何かも感じた。

以前に何度か聴いたことがあったしそれなりに好きだったこともおぼえていた。

けれど進んでフロアへ出る気にはなれずに、やはり座上で煙草をくゆらせながら眺めるのみであった。

なるほど、私が聴かなかつた間にさらに技術は研鑽され、音楽性も洗練されていた。

個人的には好きだ。

好きの上に大をつけてもかまわない。

けれど、埋もれるだろう。

陽の目を浴びることは恐らく、ない。

それが僕の厭世的な気持ちを加速させた。

このままライヴハウスを飛び出て死んでやるのか、そんなことす

ら頭に浮かんだ。

自分の好きなもの、認めるもの、それが世間様の評価を得られないということとはなかなか悲しいことであるし、ひいては自分自身を否定されているような気にすらなった。

三つ目のバンド。

これまた同じぐらいの年代で、ギターボーカルとドラムは男で、ベースは女。

聴き出しはなんともありがちで、凜として時雨のパクリかとさえ思ったが、それは私の耳がフシアナだったらしく、もっと柔和な別物であり、聴いているうちに私は音に魅了された。

しかしながら、パフォーマンスについてはなんともいえない。

あの、目を大きく見開いてマイクにかじりつくような歌唱法、ギターを持ち跳ね回ってはステージの下に下りてくるスタイル、その行動原理に本当に感情が込められていれば文句はないのだけれど、「どこぞのバンドがやっていてかっこいいから真似した」みたいな匂いが鼻について仕方なかった。

ベースの女子の長く伸びたストレートで少しボサボサの頭も、「見て見て退廃的なアタシかっこいいでしょ」的な何かを感じてしまつて、陳腐に思えた。

私が歪な受け取り方をしているのだということは、わかっている。けれど、鼻につく。

正直な感想である。

四つ目のバンド。

ボーカルを殺してやろうかと思った。

彼女は、媚であった。

媚以外のなにもでもなかった。

キンキンと頭に響いてうざったい劣化した大塚愛みたいな歌声と、醜いトロールに花嫁衣裳を着せたような容貌については何も言わない。

しかしながらだ。

あの媚を孕んだステージ上での動きと、肉欲丸出しの嬌声には苦言を呈さずにはいられない。

恐らく意識的にやっているのだろうが、ステージで彼女が動くたびにわりかし豊満な乳が揺れ、男の客の視線はそこに集中し腕を突き上げるのだが、ちゃんと音楽を聴きに来ている客や女性客は閉口していた。

バンドは音楽を売るものだと思っているが、あのバンドに限っては乳を売っているといっても過言ではない。

なにやらファンタジーな名前のバンドだった気がするが、今すぐバンド名を乳に改名した方がよいのではないかと私は思う。

顔や体で客を集めるのが悪いとは言わない。むしろ商業的にはそれが正しいとも思えるし、結局売った者勝ちという側面は、資本主義である以上は否定できない。

けれどそれも、最低限の質の音楽が伴った話である。

あそこまで露骨なやり方をするのならば、むしろ音楽は捨て置いてグラビアなどで乳を堂々と売り物にすればよいのだ。

もっとも、トロールの垂れ下がる乳などに商業的価値があるとは思えないので売れないだろうが。

五つ目はバンドではない。

シンガーソングライターである。

更に言えば、当初の目的である友人だった。

二つ、三つ目のバンドでそれなりにポルテージを上げることができたのにも関わらず、四つ目のそれで気分をぶち壊しにされた僕はとっては、救いの手であった。

これから綴る感想は、もちろん友人であるから臍負が生じる。臍負が生じるけれども、臍負目なしに見ても今日で一番楽しかった、ということだけは力強く言っておきたい。

彼の音楽は、自然そのものである。

もう少し噛み砕いて言うならば、彼の音楽を聴いているときは自然の中に放り出されたように、無垢で、無防備で、そして肩の力の抜けた自然な状態にさせられた。

音楽とは、音が鳴る以上、程度の差はあれどうるさいものだ。

けれど彼の音楽は、いわば静寂そのものであった。

静謐さをたたえたその音楽を耳にしながら、私は沢山のことを考えた。

これは異常なことだった。

基本的にライブに行くと、私は頭を空っぽにして踊り狂うのである。

ところが、彼の音楽はその逆で、私にあまたの思考をもたらすのである。

音楽を聴きながら頭を張り巡らせることができるぐらい、彼の音楽は自然と同義なのだった。

そして、媚びない音楽だった。

彼の音楽とはすなわち、彼自身の苦悩であり、彼自身への応援歌であり、彼自身の希望を歌った者だ。

媚びないゆえに大多数の人間の支持を得ることはできない、けれどもひとたび共感した者にはなにもものにも代えがたい力強いメッセージとなり得る、そんな音楽だった。

筆舌に尽くしがたいものを、筆で表す表現を私は知らない。

筆舌に尽くせぬというからには、そもそもそんな表現はないのだろうか。

だから私は残念ながら、こう言うことしかできないのだ  
素晴らしかった。

さて、完全にライブレポになってしまった。

もう少し何かしらの要素を入れたいところだが、なにぶんすでに一話としてはかなりの文章量になってしまっているので、あまり良い引き方ではないが、今号はこれにて終わりとする。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5025y/>

---

筆持つ阿呆に、読む阿呆。

2011年11月21日23時48分発行